



—東地中海地域ニュース—

レバノン：レバノン・サウジ・シリア三首脳会談の開催

研究員 江崎 智絵

1. サウジ国王及びシリア大統領のレバノン訪問概要

2010年7月29日、サウジアラビアのアブドッラー国王は、シリアを訪問し、バッシュール・アサド大統領と会談した。そして、翌30日、両首脳はサウジ国王専用機でレバノンを訪問した。サウジ国王によるレバノン訪問は、サウード国王が1957年に同国を訪問して以来のことであった。ただし、アブドッラー国王は、皇太子時代の2002年3月にベイルートで開催されたアラブ連盟首脳会談に出席するためレバノンを訪問していた。一方、バッシュール・アサド大統領のレバノン訪問は、2005年に発生したハリリー元レバノン首相の暗殺事件以来のことであった。

レバノン空港到着後、両首脳は、大統領府に移動してスレイマーン大統領、ベッリ国会議長、ハリリー首相及びチャーミー外相らと拡大会合を行った。そして、サウジ・シリア・レバノンの三首脳会談へと移行した。会談時間は30分程。

三首脳会談を終えたサウジのアブドッラー国王は、ハリリー首相と二者会談を行った後、ヨルダンを訪問し、アブドッラー2世国王と会談した。一方、シリアのバッシュール・アサド大統領は、ベッリ国会議長及びハリリー首相とそれぞれ個別に二者会談を行い、帰路に着いた。

2. 三首脳会談の協議内容

三首脳会談の協議内容については、同会談後に発出された最終声明から一定の理解を得ることができる。同声明の要点は、以下のとおり。

(1) レバノン情勢について

- ・ レバノンの国民合意及び国内的安定を強化し、経済及び社会開発の機会を改善する方策について協議。
- ・ 2008年5月に締結されたドーハ合意以降のレバノン情勢に前向きな進展がみられることを評価。事態の沈静化（タハディア）及び対話が継続され、国民統一が強化されるとともに、体外的な危険を追い払うことを確認。
- ・ 自国の主権及び独立に対するイスラエルの脅威に直面しているレバノンとの連帯を表明。
- ・ ドーハ合意に対する支援の継続、タイフ合意の完全な履行、国民対話委員会の継続、法及び挙国一致内閣の支配確立等の重要性を確認。

(2) 地域情勢について

- ・ アラブ諸国が直面している諸問題（特にイスラエルによるアラブの領土の占領、パレスチナ人に対す

る犯罪、ガザ地区の封鎖、エルサレムのユダヤ化が続いていること)について統一の立場を堅持する必要性を確認。

3. レバノンをめぐるサウジ・シリア関係と今後の展望

サウジのアブドゥラー国王とシリアのバシヤール・アサド大統領による今回のレバノン訪問については、サウジとシリアの関係改善とみる向きが多い。両国の関係については、2009年10月にアブドゥラー国王によるシリア訪問が行われ、本年1月及び3月にはサウド外相がシリアを訪問し、バシヤール・アサド大統領と会談する等、それまでの冷却期間から徐々に脱出しつつあるという印象が強まっていた。

レバノンとの関係では、スンニ派のサウジとシーア派政権のシリアという両国の代理戦争がレバノンで行われているという見方もあった。両国がレバノンの内政に一定の影響力を有していることは、ハリリー首相による組閣過程でのサウジ訪問やスレイマーン大統領とバシヤール・アサド大統領との頻繁な連絡に鑑みても明らかといえよう。そうした中で、今回の両首脳によるレバノン訪問は、レバノン国内の各勢力に対して、今以上の政治的混乱の発生をけん制するという意味合いもあったのではないであろうか。

いずれにしても、レバノンの課題は同国全土への主権の確立にあることに違いはない。同国の内政が地域情勢に左右される側面が否めない以上、今回の訪問がレバノン一国のみならず、よりよい地域的安定へ寄与するのか否かのひとつの判断基準は、サウジとシリアが中東和平という共通の課題にどのようにお互いの影響力を行使していくかという点であるともいえよう。